

村野次郎創刊

# 香蘭



2025年(令和7年)4月号

第 102 卷

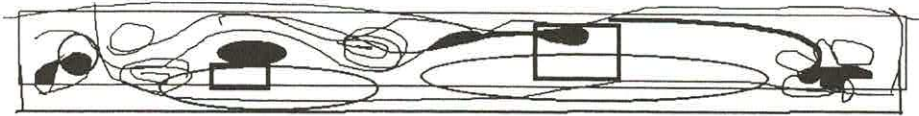
第 4 号

通卷 1132 号

二〇二五年(令和七年)四月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第一〇二卷第四号



# 香 蘭

2025年(令和7年)4月号  
第102巻 第4号 通巻1132号

## 目 次

|                   |        |    |
|-------------------|--------|----|
| 村野次郎作品 私の愛誦歌(116) | 山下 紘 正 | 表二 |
| 近詠十五首 からっぽの心      | 安田 恵子  | 2  |
| 作 品               |        | 4  |
| 一                 |        | 22 |
| 二                 |        | 29 |
| 三                 |        | 35 |

### 推薦香蘭集

### 香 蘭 集

|                             |              |                |    |
|-----------------------------|--------------|----------------|----|
| 作品一                         | 十首選(二月号)     | 丸山三枝子選         | 14 |
| 作品二・三                       | 十首選(二月号)     | 渡辺礼比子様         | 16 |
| 村野次郎への旅(180)                | 昭和期の「香蘭」(十五) | 千々和 久幸         | 18 |
| 一頁公論(47)                    | 唱歌の記憶        | 篠永 路子          | 21 |
| 続・酔風船(16)                   | 老いと死の表情      | 千々和 久幸         | 27 |
| 伊藤康子「カスターマーサービス」評(二月号近詠十五首) |              | 牧野 道子          | 40 |
| 七 首 抄(二月号)                  |              | 黒羽・生田・柏原(貞)・木村 | 41 |
| エッセイ・自由研究                   | ウイルスと風邪の短歌   | 藤田 祐 恵         | 42 |
| 焦 点(二月号)                    | 現実と非現実のはざま   | 高 島 憲 子        | 44 |
| 作 品 評(二月号)                  | 作品一          | 谷 本 朝 江        | 46 |
|                             | 作品二          | 関 口 静 子        | 48 |
|                             | 作品三          | 柏 原 陽 子        | 50 |
|                             | 香蘭集          | 高 添 宝          | 52 |

### 緑 地 帯

金子(幸)・館ヶ沢・市川

|                              |           |       |
|------------------------------|-----------|-------|
| 明宝研究会 第一六〇回 一月例会 明宝研究会会員作品批評 | 雁 部 貞 夫   | 56    |
| 他誌拝見 138                     | 松 沢 みどり   | 61    |
| 歌会及び会合・会員消息・他                |           | 65    |
| 編集後記・新宿日記                    |           | 70    |
| 表紙絵                          | 山口 蓬春「桔梗」 | 表三    |
|                              | 目次・緑地帯カット | 和田 和雄 |

# 濁流にさからひ立てる杭一つ

瀬をさかのぼりゆくがに見ゆる

## 『村野次郎歌集』

香蘭に入会した時から『村野次郎三百首』を繰り返して読み、印象に残った歌のひとつに、昭和三十五年作品の掲出歌があります。

村野先生は、前日までの大雨で水嵩が増し激しく流れる濁流をじっと見詰めているうちに、流れに逆らうように立つ一本の杭に気がついたのでしよう。その杭に厳しい世の中を渡ってきたご自分の姿を重ねて見ているうちに、その杭が濁流に逆らい、遡るように感じ、強い意志をもつたものとしての存在感が心に残ったようです。当時、先生は六十六歳で実業および短歌の世界で実績を残し、まだまだこれからへの意欲もあつたと思われます。

杭は先生ご自身を指していると受けとめました。私自身についていえば、「初心」、「目標」などを抛り所に、流れに漂いながら人生を歩んで来て今があり、杭にはなりません。

それだけに杭の存在感が強く印象に残りました。

# からっぽの心

安田 恵子

からっぽの心茶房に連れゆきてトラディショナルホットケーキを食む  
やがていつか想い出だけがしんしんとがわ身の内に降りて積もるか  
わが撮りしにこりと笑う一枚が写真ぎらいの夫の遺影に

手をのばし確<sup>た</sup>けき人の亡き夜の闇に列車の走りゆく音

かぎりなくひろがりゆけり淋しさを納めて青き空を見あげる

いつも座す人亡き椅子に夕暮のさみしい貌がどしりと座る

どこをどう歩いて来しか雨に濡れ待つ人のなき暗<sup>や</sup>き家に帰す

この空も夫とどこかで見しものはるか遠くに浮かぶ白雲

目を細め紫煙みあげる横顔をふと思い出すあの日あの時

待たすこと待つことのなきこれの家にかなる鬱を飼いならさんか

しらじらと白磁の器に飼いならず孔雀に今宵スープを注ぐ

## ひと言随想 ひとつの希望

素朴なる汝の言葉のはしはしに伝いきしものわれを励ます

葉も落ちて冬木となりて露月にボケ三輪が寄りて紅くれない

この路がいかな闇夜であろうとも行かねばならぬ生きねばならぬ

コーヒーの白磁カップに残されし真昼の紅も時になまめく

仕事引退後、絵に興味があったことで友人は絵の方に行くのではと思っていたと言う。

ところが十三年前、外科病院で同室であった八木橋洋子さんと運命的な出会いがあり、まさに私には運命的と思われるのである。洋子さん曰く「紙と鉛筆があれば」のひと言で私の心はすんなりと、短歌に傾いたのである。私には全くの未知の世界であったが、八木橋さんはじめ会の皆さんに支えられ今日まで続

けることが出来、感謝の気持ちでいっぱいである。昨年十月、入退院を繰り返していた夫が亡くなり、何とも言えぬさみしさと、脱力感を味わった。こんな時はどうすれば良いのか。いつまでもへこんではかりいられない。悲しんでばかりいられない。苦しまぎれに一首ができた。今では短歌は私の希望のひとつである。額の中の夫が何か言いたそうな顔で笑っている。



## 四 選 者 の 作 品

街 上 平塚 千々と久幸

相聞歌の一首もなく賑やかに新年歌会終了したり

街上にわずかな風の舞いいたり ハッピーニューイヤー行くところなし  
二階には灯の点りおり句会まだ続きいるらし木枯らし過ぎつ  
アイドルが老いさらばえて歌いいる昭和歌謡のどこか淋しも  
神社裏通り行きたる麗人はこの町に住む狐ならずや

不毛なるひと日ならんか午後よりは卯茹でつつ来ぬきみを待つ

アメリカの恩恵は知らず雨の日も風の日もただ日米同盟

酒飲まぬ日はあらざるにしばしばも妻の月命日を忘るる

明け暮れ 東京 桜井京子

壁ぎはを行つたり来たりを繰りかへす猛暑の日々の蟻の明け暮れ  
ただ待つてゐるだけなれば妄想を逞しくする蜘蛛の明け暮れ  
甘やかな青春なんぞも見て来たる夏の終はりの海の明け暮れ  
幼稚園に行つて戻つてバナナ食べ成長してゆく結衣の明け暮れ  
悪者を退治しながらはるばると水戸黄門の旅の明け暮れ  
人間はますます愚かになるらしい手を拱いてゐる神の明け暮れ

パソコンに向かつてばかりの妻のため夕餉をつくる夫の明け暮れ  
ぼんやりと雲を眺めてゐるだらう君なき後のわれの明け暮れ  
燃えないゴミ 横浜 渡辺 礼比子

ペーパークーに愚図りいし兎の大人しくなりたる見ればスマホを弄う  
ひとしきり悲鳴あげたり収集車に吸い込まれゆく燃えないゴミは  
しくじつてライン押ししたというけれどさびしかったんじやないかなは  
若かりしわがごとごと批判せし母は存外人望集む

若き日の母に憧れいたりとうワインと薔薇を携えて来て  
歌会に痛サバイバーふたり座す故郷に戻り来れるごとく  
衰えて辞め行く人もある会に癒えたる君の来れば嬉しも  
遅刻すと都電のあとを追いかくる夢に魘さるるななそじまりよつ  
テンブラ、タバタイ 鎌倉 高畠 憲子

「施設には行かない、ここで終はりたい」父の希望を砕く転倒  
面会十五分往復四時間の車窓に見てをり青き筑波山を  
病院に越年は初の父と思ひ取りあへず新年の陽を拝みたり  
松飾り外したとたんに施設より義母の容態急変の報  
容態に気を揉む日日のかつてあり昭和天皇病めるかの冬  
昭和六十三年暮れに發送の結婚式招待状は西暦にせり  
昭和六十四年明けて八日目 平成の元年はわれらの結婚元年  
会はせたい人は今のうちにと言はれはる義母が咳く「テンブラ、タバタイ」

# 作品一 十首選



(二月号作品から)

丸山 三枝子 選

・夜の底に消えて行きたる酔漢を昨夜のわれと思っていける

千々と久幸

「落葉と酔漢」の連作七首の掉尾に置かれた歌。月夜の夜の公園で見かけた「酔漢」の百態がドラマの映像を辿るように順を追って描写されている。五首目に〈この男にも得意な日々があつたのだ風に追われるように消えしが〉があり、他者の眼で酔漢をスケッチしている。だが、掉尾のこの歌で、スケッチの対象は作者自身であった、これはある月の夜の自画像であつた、と思われ。連作の醍醐味はこんなところにもあつた、と鑑賞した。この抄出歌は翌朝の回想なのだが、何かひんやりとして迫るものを感じさせる。

・街角の大きな時計が消えてゐる 残り時間はもう数へない

石井 雅子

約三年にわたるコロナ禍の時期を脱して街に出てみたら風景がすっかり変わっていた。この「街角の大きな時計」は作者の馴染みの風景であつたと共に、時間確認のものでもあつたらう。ここでは上旬の事実を先ず提示して下句で心象に転換したことで、後期高齢を過ぎた作者の、さばさばとした人生観が窺える。幾分開き直りのよう

にも受け取れ、それだからこそその下句の表現の豊かな膨らみは読者に語りかけてくれるようである。時間が止まることは無いのだから、「残り時間」に縛られないで今を生きようと思悟している。

・庭隅の紅花一葉草の足 こんなどころで今年は咲いて

伊藤美恵子

「紅花一葉草」は多年草の山草で濃いピンクの、下向きの可憐な小花である。作者の山の家の庭か、自宅の庭に植え替えたものかも知れない。思いがけない位置から芽生えて咲いた花を驚き、眺めている作者。「足」が面白い。去年芽生えて咲いた花が、今年も思いもよらぬ「こんなどころ」まで歩いて来て咲いた、と一瞬錯覚したのでらう。植物の命の神秘などと言ったらオーバーになるが、まあ、こんなどころに咲いておまえは、と花を叱って見せながらも嬉しそうな作者でもあらうか。

・蓄へる馬鈴薯の芽の出でたるを掻く背に秋日ほのかに温し

岩田 明美

体調のすぐれない日々が続いていた作者のホッとするひとときが見える。収穫した馬鈴薯を蓄えておくと、「芽」が出てきてどんどん伸びてくるから、それを掻く仕事をしている、ゆつたりとした時間。庭先か縁側か、その作者の背に射す「秋日」の「ほのかな温」とさを感じている。うらうらとした春日ではない、ほのかな温とさの「秋日」が、やがてやって来る冬の厳しい寒さを思わせる。

・次の世は妹となり姉さんと呼びたきひとよ房子さんほも

江口 綱代

「房子さん」は、香蘭歌友の脇谷房子さんだらう。初句の「次の世は」には、作者の憧れと謙虚な気持ちが含まれており、心憎い表

現だ。房子さんへの作者の気持ちは私も全く同じなのだが、このように上手く表せなかった。房子さんという人の優しさや包容力、場に応じて、さりげなく濃やかな気配りのできる人を、「妹となり姉さんと呼びたきひとよ」と具体的に味わい深く、しかも端的に表現されている。この一首は、この先ずっと私の心に残る作品だ。

・炎昼を道ばたに咲く花カンナ どこにも行けず 根のあるなれば

大井田啓子

先ず二ヶ所の一字空けは、ここで一拍置いて読ませたい、との作者の工夫であろう。単なる叙景歌にはしたくないのだ。当たり前のことを、視点をずらして詠む作者特有のウィットに富んだ歌である。例えば「炎昼を道ばたに咲く」ではなく、「炎昼の道ばたに咲く」だと、「どこにも行けず」の擬人化が損なわれて了う。この初句の助詞「を」は作者に選ばれた「を」であろう。「どこにも行けず」、生まれたとところに根づいて咲く道ばたの「カンナ」は、作者自身であるかも知れない。

・この先はいかばかりなる我が命きよのシャインマスカットうま  
し

近藤 光子

年を重ねるほどに心細くなってくる我々の寿命が思われる。だからこそ、一日一日を丁寧に生きて行きたい、と願っている。おやつか食後の、季節のフルーツ「シャインマスカット」をしみじみと賞味している作者。何を見ても残り少ない「命」が思われるのだらう。先細りしてゆく「我が命」と、たまたま目にした食卓のシャインマスカットにその思いを託したのだらう。

・紋黄蝶ふわりふわりと舞っており小春日和は彼の世のよう

沙 阿 羅

下句の幻想的な感覚、把握に注目した。作者は、どんな気分のもとに「彼の世」をイメージしたのだろうか。「ふわりふわりと」漂ように舞っている心もとなさであるかも知れない。それがこの世ではない「彼の世」を導き出した。地獄でも極楽でもない、その中間のような小春日和の心地良さが偲ばれる。

・放射線浴びても死なぬクマムシは微生物なり何やら頼もし

白井 絹子

放射線を浴びても死なない、人間よりも生命力のある微生物の「クマムシ」が「頼もし」という意外な発見がユニークである。「クマムシ」をネットで検索すると、4対8本のずんぐりとした脚でゆつくり歩くから緩歩動物、形がクマに似ていることから「クマムシ」と呼ばれている、とある。肉眼では確認しにくいのが、眼を背けたくなるようなこの「微生物」は、どんな環境にでも生息できる「頼もし」い生物らしい。日常の身辺から掬われた盲点の発見が面白く、なんともユニークな作品である。

・地を這へる寒気をひと抱きとめてキャベツ巻きゆく立冬の朝

土井紘二郎

野菜作りがだんだん板についてきた作者。丹精込めて育てたキャベツの成長過程が楽しみなのだ。淡々と客観写生をしながら、そこに作者自身の思いを重ねているようでもある。「寒気をひと抱きとめて」成長してゆくキャベツのたくましさ。寒さに耐えて着実に成長してゆくキャベツの、生命力を貫こうとしている様子を、作者自身の生き様に重ねて見ているではあるまいか。



# 作品二、三 十首選



(二月号作品から)

渡 辺 礼比子 選

## 〈作品二〉

・車窓より景色は見えずつトンネルを次々抜ける山陽新幹線

小笹岐美子

主観を交えず、描写だけで成り立っているこの一首、あとは読者にお任せという詠みぶりが潔い。トンネルばかりでのんびり景色を楽しむことができない鉄道の旅は、さぞ味気無いものだったろう。日本の鉄道がひたすらスピードを追求した結果、自然破壊が進み、犠牲にされてきたものはかり知れない。鋭い文明批評の歌と読んだ。

・閉じた眼に涙うつすら光りたり気づいているかと額を撫でる

小原 裕光

末期の母を見舞う。衰弱した母がかすかに涙を浮かべているのは、自分を息子と認識してのことではないか、と作者は期待をこめて思う。「額を撫でる」というスキンシップに、母恋いの気持ちの滲む、切ない別離の歌。

・警察へ固定電話でかけよといふ住所が一瞬で判るさうなの

田中あさひ

そうか、防犯システムはそこまで進んでいるのかと感心したと同

時に、そうまでしなくては、安全な生活が保たれない、昨今の日本の治安の悪化について再認識させられた。広報か何かから得た情報であろうか、おカタい内容に、会話の切れ端のような「さうなの」を接続したことにより、軽みを演出した。

・世界遺産のこの長閑かなる白川の空気わけあふ多国籍われら

田村 久美

インバウンドの増加により、有名な観光地はどこもかしこも外国語が姦しく飛び交っている。作者の旅先の白川郷も御多分にもれず異国の人々で賑わっていた。こうした景を苦々しいものとして詠んだ歌はいくらでもある。だが、この歌では「白川の空気わけあふ」という。世界遺産なのだから、日本人だけで独占するのではなく、世界中の人とともに楽しもうという、見上げた精神である。これぞ本物の国際感覚といえるのではないかと、目の覚める思いであった。

・子ら言えり「釣瓶落としはもう古いフォークボールのよう」に落つる陽

中井 房江

秋の夕陽を見れば、人はすぐ「釣瓶落としの」などという常套句を使ったがる。しかし、そんな言葉を聞く度に、いま釣瓶の実物を見たことのある人がどれだけのいるのだろうかと物申したくなる。その点子供たちは、「フォークボールのように落ちていく夕日」と手垢のつかない表現をしてくれるから、嬉しくなってしまう。作者が歌の中で子らの言葉に感想を付け加えず、省略を利かせて、簡潔に詠んだ点に惹かれた。

・今何をやるうとしたか忘れたり日に幾度も首をかしげる

柳沼きよ子

二階にあがると何をしにきたか思いだせない、探し物をしているのに何を探しているのか分からなくなる、今出来たと思つた歌もすぐにメモしなければ、あえなく消えてしまう。年を取れば、大方の人は毎日首を傾げっぱなしであろう。老いの自覚を簡潔に詠んで共感と呼ぶ一首。まるで自分のことをいわれているようだ。

・夕食のメニュー決まらずキッチンに秋の気配の淡き陽をふむ

安田 恵子

毎日のメニューを考えるのは、主婦にとつて欠かせない仕事である。食べる気力のわかないときには、メニューもなかなか決まらない。もし作者が一人暮らしだとしても、それは同じこと。食に向かう意欲は生きる気力にもかわりがある。下旬の抑制の効いた表現から、作者のシルエットが立ち上がってくる。哀感の滲む歌。

### 〈作品三〉

・姑のため取り付けたこの手摺りわがためとなりどっこいしょの秋

小野香代子

同じような経験をしている人はほかにいるのではないだろうか。親のために風呂、トイレ、玄関に等に手摺をとりつける。その時はこれが自分の役に立つ日などまだ先だと思つているが、あつという間に老いはやってくる。そんな時、大方の人は、三十一文字に老いの嘆きを盛っておわるところだが、この作者は手摺を挿んだ時に思わず自ら発した「どっこいしょ」によつて一首を立ち上げた。このユーモアセンス、この逞しさ、是非見習いたいものだ。

・ボストンのストリートビューを見ておれば昔の我が家が古びてあ

りぬ

小城 勝相

グーグルのストリートビューを開き、住所を打ち込むと、都会なら詳細に付近の画像を探索することができる。はじめてパソコンのこの機能を使ったときの新鮮な驚きは今でも忘れられない。自分の住所をいれるとわが庭の様子も露わに映し出されており、嬉しさ半分恥ずかしさ半分複雑な思いであつたことを思い出す。世界中が対象になつているから、作者はボストン在住時代の家の住所を検索したものであろう。古びてはいるけれど、まだ我が家は残つていて、発見した作者は、懐かしさで胸が震える思いをしたに違いない。ストリートビューをテーマにした歌は小池光なども読んでおり、決して珍しいものではないが、世界をまたにかけたこの歌はスケールの大きさにおいて、出色であると読んだ。

・目の前の写真の中でピースする亡き子は何に勝利したのか

福本 綾子

カメラを向けると、若者や子どもがピースサインをするようになったのはいつの頃からであつたか。多少の「照れ」かくしもあつてか、どの子もこの子もピースをする。この歌の背景を良く知るわけではないが、母親が夭逝した子の写真を見ている場面であろう。本来は平和を祈るためのピースサイン、この「亡き子」は例えば、スポーツの試合か何かで勝つて「やったぜ」と得意満面でピースしていたのだろうか。しかし親にとつて、子に先立たれるほど悲しく、無念な思いはない。作者は死んでしまつては何もならないではないかと、悔しさと悲しみを込めて、この下旬を詠んだのであろう。

村野次郎への旅（180）

## 昭和期の「香蘭」（十五）

「香蘭」第五卷第八號、昭和二年（1927）八月号で書き残した「前月歌壇合評」から書き継いでいこう。

### 蒼穹

岡野直七郎

#### 夜の窓

夜の窓をあけしばかりに椎の木の若葉のほひ鼻をおそひつ

部屋明りぢかにおよびて庭先の椎の青葉にわが影法師

（次郎）作者は何とかして物にふれやうと焦慮つてはいないか。冬眠せんとする人々の間にあつてこの心掛けはよい。この焦心が「あけしばかり」「ぢかにおよびて」等に見える様に見える。そして私はこれを見て好感を持ち得るのである。されど現在の氏の歌を一言にして云へば「意あつて力足らず」である。もつとよい意味の粗な心になつて飛込むか、洗練されたものを持つて押してゆくかである。

## 千々と久幸

### 潮音

小田 観堂

孟宗竹

この窓の孟宗藪の朝あらし日の出る空は茜さしきぬ

はらはらと風の窓の竹雫枕にかかり夢はさめにき

（翠子）二首とも、どうもまづい歌だと思ひます。時代を識つて下さい。私達は時代より先きを歩かうと思つてるのに、この方は後へ戻るお積りらしい。

（一）のお歌には何も持つてるものがありません。調子も三句切れから、四句の起りが出来てゐません。「朝あらし」がどうしたといふのです。

（二）のお歌はこねあげ作です。第一、「はらはら」など、細い感覚で描寫しながら、「風の窓の竹雫」みんな頭だけ着せ合せたやうな可減です。丁度方々から頭だけとつて来て見せよ

うといふずるい遣方です。「雫が枕にか、つて夢はさめた」のなど全くオツ風流心を狙つた嫌味です。「枕にか、り夢はさめにき」これだけでも、我が短歌の墮落時代の遺物詞で、胸が悪くなるではありませんか。これを所謂骨董趣味といふので、藝術を知つた振りをする画商の鑑定といふところです。

（嘉雄）二首ともに第三句を名詞で強く切つて第四句から再び起し直してゐる。どうしてもそれは俳諧の手法である。「枕にかかり夢はさめにき」と云ふやうなお座なりの句に今更何の感激をも覺えない。「孟宗藪の朝嵐」だけで既にすがすがしい朝の気分が出てゐる。「日の出る空は茜さしきぬ」などは有つても無くてもいい。否こんな無駄な句はない方がいい。

本号から巻末にあつた六號雜記が「壺中之天地」と名称を改め新発足した。早速そこに七名の同人が思い思ひの断章を寄せている。村野次郎先生も「名聲陶酔病者に」という一文を草されているので読んでみよう。

或日某所にて某新聞文藝部記者に會す。小生問ふて曰く「貴社の短歌選者は何誰がやつ



てありますか」、記者はさも安心した様に「私の方では前から佐々木博士と與謝野女史がやつてゐますからね」と如何にも自信があるやうに云つた。勿論それは兩氏とも立派な方々であるが、小説界だつて今では江見水蔭や菊地幽芳でなくて、菊地寛や中河興一の時代になつてゐるのだ、少なくとも記者が自慢するのなら北原白秋とか斎藤茂吉位の事は云つて貰ひたかつた。或はもつと若い所だつて差問はない。側の小生の友人は小生の不満に對して慰め顔に「それは新聞の投書家は皆アマツールだから其でよいのだよ」と。

成程或はさうかも知れない。兎に角所謂アマツールでない眞の歌を作る人々の興味的である人が何時も動かない定つた人であるといふことは、思ふ方も思はれる方も誠に情ない話である。一般の人は大家の名前だけを見て歌を見ずに直ぐに感心してしまふのではないか。大家といはれる人はもう一仕事して来た人だ、さう一生の中に幾度も仕事は出来まい。若い人達よ、今度は君達が代つて仕事をしなければならぬ時なのだ。

酒屋の看板だけ見て、すぐ酔つばらう人々のお芽出度さよ。これは酒の味がほんとに判

る人ぢやあない。

大変参考になる一文だから、論文を書くためのトレーニングのつもりで、少しく内容に分け入つてみよう。

先生は論の人ではない、というのがかねてよりのわたしの主張（意見）である。この一文が言わんとすることは、次の3点に要約出来よう。

1、（選歌並びに選者における）大家批判、大家は一仕事終えた人である。

2、詩歌や小説の世界では次々に若い作家が台頭し、かつての大家に代わつて斯界を先導している。

3、しかるに一般人はかつての大家を未だに斯界の永遠の先達だとして尊敬し模範にもするが、それは古い看板だけを見てその店の実力を現在も一流だと勘違いするに似ている。だからお芽でたいのだ。

しかしこの1、2、3の見方には、わたしはいささかの違和感がある。それは

1、大家ともなれば一仕事どころか二仕事、三仕事も出来る人の謂であるう。もしそうでなければその人を大家と呼ぶことはない。

2、一般の人は看板だけを見て店の実力を評価すると決めつけるのは早計である。この意見の前提には、一般人はアマツール（アマチュアの意か）であるという常識的な見方があるからである。

3、この一文は新聞の權威主義への批判であり、それ以上でも以下でもない。

つい筆が滑つて言わずもがなのことを書いてしまつたが、久し振りの先生の一文ゆえ注記しておきたかつたのである。次いで村野先生の後記から抜く。

○今月から後井嘉一氏が選歌を擔當する。氏の凝り性と深刻なる新しき神經は諸君の希望を満してくれるであらう。

○日本児童文庫にて御多忙な爲め北原先生に表紙をお願い致しかねてゐたところ今度は森田恒友画伯の快諾を得て香蘭が新装し得たことを諸君も喜んで頂きたい。

○北原先生は八月初木曾川へ、森田画伯は七月末十和田湖へ共に東京日日新聞「新日本八景」の爲めに遊ばれた。

○六號雜記を壺中之天と改む。カットを杉浦非水畫伯寄贈さる。



# 一頁公論

(47)

## 唱歌の記憶

篠永 路子

介護に関わる仕事をやるようになって20年ほど経つが、どこの施設に行っても音楽プログラムは人気があって、歌を歌うことや音楽による刺激で緊張を和らげ、人気のレクリエーションとなっている。

レクリエーション担当などをやっているうちに、定番の唱歌はだいたい参加している方が皆歌えるが、同じ唱歌でも世代によって知っている歌が違う事に気づいた。

今は団塊の世代が高齢者となり私との年齢差も少なくなつたが、その当時90代は大正初期生まれが多く、明治からの小学唱歌を幼いころに歌っていて、「美しき天然」や「紀元節」をそらで覚えていた。

私には初耳の歌で、歌集で調べると、「紀元節」は明治21年に作詞作曲されたものとあつた。四大節に因んだ歌があることもこの時初めて知つた。

唱歌の中で、音楽の本に加えられず次の世代が歌わなくなった歌があり、そういう歌は70代が知らないし、新しく加えられた歌は90代が知らないという事を皆さんの話から理解した。「ローレライ」や「故郷を離るる歌」などは知っている方がはつきり分かれる歌で、女学校で習つたと言う方もあつた。

「明治大正昭和の唱歌」(野ばら社)を見てみると、全曲の中で明治期に作られた唱歌が7割を占めている。

明治維新後、小学校の音楽の曲を選ぶにあたり、音楽取調係がスコットランドやアイルランド、ドイツなどの欧米の民謡や、欧州で作曲された美しい旋律を取り入れて、詩句は日本文学者がつけたものを「小学唱歌集」として最初の官製唱歌教材集を作つたとある。編纂は明治14年と記載があり、この初編の中に「蝶々」「むすんでひらいて」「あおげば尊し」や「蛍の光」が含まれている。第三編まで作られたらしい。

明治29年には、佐佐木信綱作詞・小山作之助作曲で「夏は来ぬ」が作られた。

また日本古謡の「さくら」や作者不明の「うさぎ」「数えうた」なども小学唱歌に取り入れ

られた。

明治30年頃には滝廉太郎が現れ、「荒城の月」「箱根八里」などの名曲が登場する。詩的な歌詞と複雑なメロディは「中学唱歌」という括りに入れられた。

明治40年代の「尋常小学唱歌一〜三」になると、戦後も長く教科書に採用された「紅葉」「茶摘」「汽車」「雪」「冬の夜」「村祭」などの歌が見受けられ、私も音楽の教科書で歌つた記憶がある。定番中の定番と言える「故郷」は大正3年の作だが、今も唱歌というと、この明治末から大正にかけての曲を思いだすのではないだろうか。

昔見た映画「ビルマの豎琴」に、日本軍が野営地で「埴生の宿」を歌っているとイギリス軍が周りを囲むが、同じメロディの「ホームスイートホーム」を歌い、一緒に合唱しているうちに戦闘にならずに一晚を明かす場面があつた。事実は不明だが、明治の音楽教育の功用なのだと思ふ。

今は若い親御さんから「自分が歌ってきた歌が子どもの教科書に見当たらない」という声も聞く。新たな歌の世代差が出てきているのだろうか。

老いと死の表情

死は向こうから突然にやってくる。だから現に生きている身には切実感も畏怖もない。マルセル・デュシャンの墓碑銘にしたがえば「さはさりながら死ぬのはいつも他人」だから、「現に生きているわたし」とは直接関係はない。

遅いなあ死よ、とわたしと山本哲也が詩の中で呟いたのは、青春の真つ只中の二十代なかばだった。「華麗に騒がしく」を合言葉に1960年代を駆け抜けようとしたわたしたちに、死は美の極北にあった。世界は輝いており、この国の経済は高度成長軌道に乗っていた。努力をすればどんなことも可能である気がした。

あれから茫茫六十年、浮世の風に漂っている間に山本は運悪く癌を病んでこの世を去り、わたしは「酔生夢死」などと粋がって酒に溺れて老いさらばえた。そして今、死は間近に迫っていることを実感せざるを得ない。残された持ち時間をどう生きるか。

そんなことを思い思いしながら友人たちの書いた老いや死についての短歌を読んでいると、こんなに手放しに老いや死を歌いあげてよいものか、といっそ心配になってくる。もともと歌人は世間知らずのオポチュニスト(御都合主義者)であることは承知しているが、こう無邪気に能天気な老いや死を歌われると逆にうそ寒くなる。論

より証拠、実作を挙げてみよう。

・老境に入りたるわれはしめたもの若者ほどに病まず悩まず

中根 誠

・その人ならもう居ないよと言ふ声のどこからかして夕ぐれとなる

松川 洋子

・死にゆくは当然といへかへりみておもしろかりしわれの一生か

尾崎左永子

いずれも現歌壇を代表する中堅ないしは長老の作品である。出所はすべて令和7年版「角川短歌年鑑」の中のもの。わずか三首で歌人の思想・心情を占うのは早計だと思いつつも、やはりどこかデュシャンの「死ぬのはいつも他人」という気楽さ(皮肉)を感じる。

まだ所有しない死の前では、想像力や思考が凍り付くらしい。もともといずれの歌も真正面から死と向き合った歌ではない偶感だと言え、それまでだが。

中根作品はパラドックス(逆説)とも読めようが、下句は本音を吐露したものであろう。結句はこの作者の特異体質だ、と言って仕舞えば抗弁の余地はないが。

松川作品はもう死を通り越して仕舞っている。死は見事にスルー(無条件に通過)されている。これをこの国(世界)の流儀で悟性とか達観とは言いたくない。

尾崎作品も松川作品とご同様に、歌人としての矜持も緊張感もない。これが歌人の老い方だと言われて仕舞えば、短歌を恨むしかなかるう。さりながらここでは、老いや死が短歌のクリエイティブな死の契機(課題)となり得ていないことを知れば足る。